

## ラカン、「改革の落とし穴」 解題に代えて

「改革の落とし穴」 *D'une réforme dans son trou* は当時のル・モンド紙の「自由なご意見を」*«libres opinions»*といった見出しで読者が投稿できるコラム向けにラカンが認めたものであるが、結局掲載されることはなかった。難文であり、はっきり言って悪文である。あまりの悪文ゆえに、ル・モンドの編集部が掲載を見合わせたのかもしれないし、ラカンの方で投稿を見送ったのかもしれない。なぜ難文かということ、内容のむずかしさではないし、修辞技法的、ゴンゴラの難解さ(も多少とも認められるが)とも異なり、奥歯に物が挟まったような言い方が多いからである。執筆時期は70年秋頃とされている。タイプで書かれたオリジナルは紛失しており、そのコピーが現存しているのであるが、コピーの仕方に問題があったのか、文字がずれていて、一部判読できない部分があり、*Journal Français Psychiatrie, 2006/4(no.27), pp3-5*にはN.Dという署名のもとで、訂正、加筆がなされており、簡単な紹介文が添えられている。

今年、『1968年五月の出来事』から50年を迎える。フランスではじつに種々雑多な出版物が刊行されている。本格的な解題となるとこれらを注意深く当たってゆく必要があろうが、正直言ってそれほどの骨の折れる仕事をするほどの体力も精神力もわたしにはない。ラカンはいわゆる(自称も含めて)左翼インテリジェンシアの多いフランスにおいて、かれ等とは一線を画している。若い頃はシャルル・モーラスの信奉者であったし、後に自己批判することにもなるファシズム論を展開していた時期があった。サルトルなどは学生が主催する集会に呼ばれてかれ等への共感を表明しているが、これとは対照的に、沈黙をまもりつづけていた。一度だけ、確かルディネスコの本(邦訳されているものではない)のなかで書かれていたと記憶しているが、ヴァンセンヌ校で(だったと思う)、集まった学生たちに半分つるし上げを食らっているような状況で、「あんまり先生たちを困らせてはいけない。こんなことをしていると、もっと怖い先生がやって来るかもしれないですよ」と言いながら、幾分寛容の精神も覗かせているような態度を取ったとされる。

わたしが本稿を訳してみたいと思ったのは、個人的な体験からである。68年というとわたしは医学部の2年生であり、当時、わたしの出身校にも青医連で活動していた同級生や先輩がいて、かれ等のはなしはよく聞かされた。先輩のひとは同じオーケストラ部員であり、非常に温厚な方で、わたしはかれを慕ってもいた。かれはしばしば学年が下であるわたしたち同期生のクラスを訪れ、青医連の掲げる改革を真に善意ある態度で説いた。同時期のわたしはまったくのノン・ポリであり、音楽と哲学に熱中していたが、哲学の方は、マルクスはまったく読まず、現象学、実存主義にかぶれていて、解った気になってハイデgger、サルトル、メルロ＝ポンティやそれらの解説書を読んでいた。精神科医になるこ

とは5年生頃から決めていた。当時、パイロット的に、地域の精神科医療をアニメートする志をお持ちになっており、診療所を開設したY大卒のY先生にお声を掛けられ、名古屋で開かれた日本精神神経学会にご一緒させていただいた。まだ学生であり予備知識なく参加した学会はいまだにショッキングな出来ごととして脳裏に刻まれている。名古屋大会は1969年の金沢大会以来の流れを汲んでいて、背景として、石川清氏の墓教授のロボットミー告発に並行するかたちで精医連(東大精神神経科医師連合)による赤レンガ自主管理へと発展する途上にあり、テーマのいくつかは「反精神医学」関連のものであったと記憶している。総会会場には病者とその家族が多数来襲し/させられ、反ではない精神医学の側の発表には「ナンセンス！」とシュプレヒコールをあげせ/るように首謀者に煽動され、フロアが静かになったのは、反精神医学の頭目であるデビッド・クーパーが壇上に上がったときだけであったが、なんとクーパーは、パフォーマンスだったのであろう、煙草に火をつけて - 消防法で禁じられているはずである - ラカンがキュルブラに火をつけるのとは断じて違う - 自由と解放をマニフェストする陳腐なスピーチ。だれがこんな奴、と批判精神だけは当時から肥大していたわたしは結局クーパーの本だけは買うことがなかった。日本精神神経学会はその後もクーパーを再三シンポジスト等として招聘しており、かれにとっては、日本は反精神医学という商品がよく売れるおいしい市場であったはずだ。

東大紛争における安田講堂占拠、赤レンガ自主管理となるとどうしても68年5月に結び付けてしまいはしないか。フランスの学生による占拠は、大学はソルボンヌだけではなくかったと思う、大学以外ではオデオン座もその対象となった。ジャン・ルイ・バローは学生側につき、マルローによって劇場から追放される。日本と違うのは、フランスではサンディカリズム(労働組合そのものの力が強いのではなく、プルドン直伝の労働取引所 *Bourse du travail* の存在、さらには労働者相互の連帯意識が強く、ストライキ *manifestation* という権利のアピールに対し周囲、さらには権力側がより寛容なのである)の伝統である。であるから、マルクスも二度目のフランス亡命に際して、宿をとったのはマティニョン〔首相官邸がある〕のそば、労働者、労働団体と接触しようとする気持はさらさらなかったのでは。で結局ロンドンへ。資本論執筆となる。『哲学の貧困』と『貧困の哲学』のどちらが上か。両方とも読んだことがないので評価の仕様がわからないが、要するにフランスの労働者にとってはサンディカリズム(〈アナルコサンディカリズム〉と呼ばれるのは、「人民銀行」をつくり、貨幣にかわりにもなる「交換券」 *bon d'échange* なるものを発行したためルイ・ボナパルトの逆鱗に触れ逮捕状発布となったのでアナルコが付くのであろう)の父のようなプルドンで十分で、屁理屈をこねるマルクスは必要なかった。プルドンの優しさがにじみ出ていると思えるのは、腐りかかった野菜ですら少しは価値があるとして、この交換券により取引された、といったエピソードである。フランスではプルドンにかなわな

いことでルサンティマンをバネにして執筆したのが『哲学の貧困』なのではないだろうか。ともあれ、68年5月には学生に続き労働者も工場占拠、ストライキに打って出た(Eric Alaryの“*Il y a 50 ans ... MAI 68*”には《*Étudiants et ouvriers : une alliance impossible*》「学生と労働者：不可能な共闘」といった記事があるが)。日本では全学連(戦後、発足ないし復活した時期としては日本共産党に先じている)から話を始めなければならないのだが、その日本共産党が学生を「階級的浮動分子」と位置付けたのが学生運動の孤立化に多大な影響を及ぼしたのではないか。いずれにせよ、一事が万事GHQが采配し、権力側もGHQのお伺いを立てねばならなかった戦争直後、つまりはホワイト・ページの時代においては、「戦犯教員追放」、「民主的教授復職」をスローガンのひとつとする全学連もGHQに利用されていた。だがレッド・ページの「回れ右」により、他の諸々と同様、かれ等は梯子を外されたのだ。68年5月と全共闘による東大紛争の重なり合いと径庭を見てもみよう。フランスではアナキスト(当時コーン=バンディはアナキスト・グループに属していた。ところが、かれはCGTのデモにも参加している)もマオイストもトロツキストも仲良くやっていた。全共闘以後の内ゲバは他国では類をみない。似たようなものがフランスにあるとすると、精神分析グループの内紛、分裂、新グループの創設ぐらいか。東大安田講堂事件に際しては、全共闘に新左翼グループ(セクト)も加わり(<https://www.youtube.com/watch?v=Q5qq0jW1yTE> 参照のこと)、この点ではソルボンヌと似ている。共産党も両国では似ている。こよなく「秩序」を愛する政党なのであり、東大についてもソルボンヌについても両国共産党は批判的であった。ダニエル・コーン・バンディがフランスの学生たちの精神的支柱であったことに、わたしは、日本人的心性として(わたしが日本人の心性を代表していると言う資格はないが)、腑に落ちないところがある。学生たちは、かれが拘留されたとき「われわれは皆ドイツ系ユダヤ人だ！」とシュプレヒ・コールをもって抗議したとされるが、そもそもかれはフランス、ドイツ両国の国籍を持っていながら、兵役拒否によりフランス国籍を剥奪されたのである(憲法9条のはなしは措くとして、自衛隊員 - もちろん入隊はフランス語で言えば、*appelé*〈徴兵による〉ではなく *engagé*〈志願による〉なのは当然として - の多くは平和主義者であると確信している。兵役=戦役ではない。コーン・バンディの場合、戦役あるいはこれに類する任務拒否にて営倉送りの方が勇氣ある行動と看做されたはずである)。かれがフランクフルト市長に選ばれたことも理解に苦しむ。黒から緑へとうまく時流に乗ってきたということか。スチューデント・パワーは全世界的拡がりを見せたのであるが、各国で学生にとって好餌となっていたのが「性の解放」であろうし、コーン・バンディもこれをマニフェストとして重視していたのだ。当時、権力側は女子学生寮への男子学生の立ち入り禁止を強化しよう

としていたのである。一方で日本の全学連はスローガンの一つとして「エロ・グロ文化排斥、民族文化を守れ！」を掲げていた(もちろん、個々の学生間同士の異性関係に関しては寛容であり、バランスがとれていた)。

わたし自身は学生運動には一切関わりを持ってこなかったのも、筋違いなことを書き連ねてきたかもしれない。手元に伴野準一著『全学連と全共闘』(平凡社新書 - 2010/10/16 上梓)があるが、未読である。著者は1961年生まれなので、いわゆる全共闘世代ではなく、本書がフポルタージュ等フィールド・ワークをもとにしているようであり、アマゾンのカスタマー・レビューの評価でもこの(ロラン・バルト流にいうと、エクリチュール・ゼロ的な)執筆姿勢を高く評価している方が多く、これから読むつもりである。あるいは読後、本コメントを修正する必要があるかもしれないが、それは後日にさせていただく。

ラカンの「改革の落とし穴」*D'une réforme dans son trou* に話を戻すと、拙訳にかなりの注をいれたので、これら注において、わたしのやや主観的な読解(よみ)を汲みとっていただけのものと思うが、繰り返しの言い訳になるが、原文は難解(これも繰り返しになるが、悪文ゆえの難解さがある)であり、誤訳も多々あると思う。しかし、ラカンの1970年6月10日(と carin info の N.D.氏は記している)時点でのかれの心境を斟酌しながら読んだわけであり、全体としてかれの、言うならば、隔靴搔痒から来る苦しさは伝わってきた。さらに、市場万能主義についてのラカン流解釈は今をもってアクチュアリティを失っていないことを強調したい。ラカンからすると、今の世の中は、マルクスが言う以上に、あらゆるものが商品となってしまっていて、ひとがこれは商品とは異なるものと思っているものでも商品となっているのである。また差別化の欠如がある。どんなに丹念に仕上げたものでも、市場においては、差別化が働かなく、その他乱造される商品と同等の価値しか与えられない。消費者は、過酷な児童労働によって商品化されたサフランも匠の技に寄る工芸品等もほぼ全工程がロボットによって生産されるガジェットも、価格が同じであれば差別化されずに一様に購入し消費する。さらに恐ろしいのは、労働はともかく、教育という物質 *substance* とは呼べないし物質には還元されそうに見えないものでも商品となっている事実である。ラカンがマルクスの剰余-価値から借りてきた剰余-ジュイール *le plus-de-jour* は市場に溢れている。一方で、セミナー 16 卷『ひとつの〈他者〉から小文字の他者へ』に出てくる「ダナイデスの壺」の例にみるジュイッサンスにも目を向けなければならない。商品は市場に溢れているのであるから、消費者はそれを消費しなくてはならないのであり、これは際限がないのである。アルコール主義その他の依存はこのようにして説明される。

「改革の落とし穴」全文を通して、まず第一に頭をよぎる格言がある。「地獄(へ)の道は善意によって敷かれている」である。フランス語では *Le chemin de l'enfer est pavé de bonnes intentions.* が一般的であるが、わたしとしては *Le chemin vers l'enfer est pavé de*

**bonnes intentions** [(へ)のカッコを開くところなる]の方がしっくり来る。出典は明らかでない。マルクスにもこの一節があるとされている。全体主義への警告とも読めるが、そうであれば、現在は全体主義の時代ということになる。68年5月の学生たちは、敷石を剥がして **CRS**(機動隊)に向けての投石として用いあるいはこれを使ってバリケードを築いた。これとて善意が働いていたはずである。地獄におけるスローガンのひとつが「自由」なのであり、既に支配的になっている言葉が「科学」である。似非科学も科学（これも商品とされる）というまじ物のなかで差別化が働かないのである。